

カミュの『異邦人』解釈

(その2)

平 田 重 和

小説の「二部」においてもムルソーの、分析を拒否するようなあの〈中性的〉な声は基本的には変わっていない。「むろん、私は深くママンを愛していたが、しかし、それは何も意味はない。すべて健康なひとは、多少とも、愛する者の死を期待するものだ。」⁽¹⁾と云って弁護士を驚かせている。

さらに、たとえ極くささやかなものであっても自然が演出してくれる「富」が、ムルソーの幸福の源であると言うことも基本的には変わっていない。次の引用文がこのことを立証していよう。

「裁判所を出て、車に乗る時、ほんの一瞬、私は夏の夕べの香りとお色を感じた。護送車の薄闇の中で、自分の疲労の底から湧き出るように、一つ一つ聞き分けた。すでにやわらいだ大気のなかの、新聞売りの叫び、辻公園のなかの最後の鳥たち。サンドイッチ売りの呼び声。街の高台の曲がり角での、電車の軋み。港の上に夜がおりる前の、あの空のざわめき。」⁽²⁾

これは裁判の過程での、ある折り、捕えられる以前のことを思いだしてのムルソーの述懐である。少し先の方でもほとんど同じような感想を述べている。

「弁護士がしゃべり続けている間、街の方から、傍聴席と法廷のひろがりを経て、アイスクリーム売りのラッパの音が、私の耳にまで響いて来たのだ。もはや私のものでない生活の、しかし、そこには最も貧弱だが、

(1) L'Etranger (folio) p. 102.

(2) Ibid. p. 150~151.

最高に長続きのする喜びを見出してきた生活の思い出に私は襲われた。夏の匂い、私の愛していた町、とある夕暮れの空、マリイの笑い声とその服。この場で私のしている無用なことすべてが、その時、喉もとまでこみあげて来て、私はたった一つ、これが早く終わり、そして独房へ帰って眠りたい、と言うことだけしか願わなかった。』⁽³⁾ こうした述懐はムルソーの本質が変わっていないことを暗示するものであろう。

時折垣間みせる断片よりも、小説の最後で「世界の優しい無関心」に心を開き、再び「世界を自分に近いものと感じ、自分の兄弟のように感じ」て自らの幸福を悟ると言うのは、小説における一種の円環手法を思わせるものだが、ムルソーの究極的な人生観（価値観）を雄弁に物語るものである。

しかし、一方で我々はムルソーのエクリチュールが「二部」において変化していることに気付く。サルトルは『異邦人』の文章についてその「非連続性」を言い、「おのおのの章句は一つの現在だ」と述べて、さらに、次のように指摘した。

「言葉は、それが築かれるやいなや、虚無からの創造だ。『異邦人』の章句は一つの島になる。我々は、章句から章句へ、虚無から虚無へと、滝となって落ちる。』⁽⁴⁾

正確には、サルトルのこの指摘は大部分「一部」に当てはまるものであって、「二部」の章句は反省的であり分析的であり、多く説明的でさえある。

「二部」冒頭での予審判事とのやりとりの部分をみてみよう。「私が神を信ずるか、尋ねた。私は信じないと答えた。彼は憤然として腰をおろした。彼は、そんなことはあり得ない、すべての人間は神を信じている、自分の顔を見られないような人間ですらも、やはり信じているのだ、と言った。それが彼の信念だったし、それをしも疑わねばならぬとしたら、彼の生には意味がなくなつたろう。』⁽⁵⁾（注：下線部筆者）

(3) Ibid. p. 162~163.

(4) Sartre: SITUATIONS, I (Gallimard) p. 117.

(5) L'Etranger (folio) p. 108.

このような分析的・説明的な箇所は獄中での生活の苦痛を述べたところにも見られる。「二部」2章の冒頭のところで、「断じて語りたくなかったことがらもある」と言って、刑務所内での捕らわれの身から生ずる不都合を語っている。それらは「女に対する欲望」を抑えねばならないことであり、「煙草を吸えない」ことである。さらに、「睡眠をとることがおもうようにいかないこと」もそのうちはある。

「一部」のムルソーは「過去のない人間」であった。しかし、「二部」のムルソーは「思い出す」人間である。「時を殺すこと」も懲罰の一つであることを理解し、「思い出すことを覚えてからは、もう退屈することもなくなってしまった」⁽⁶⁾と言い、「たった一日しか生活しなかった人間でも、刑務所の中で苦もなく百年も生きてゆかれる、ということがわかった。」⁽⁷⁾と言って「過去」が生きる支えとなることを述べる。

死刑の判決が下されて後、ムルソーは首斬装置の無慈悲なメカニズムに思いを馳せる。そして、この装置の確実性から逃れるチャンスがないことにおもいどり「結局のところ、三十才でも、七十才でも死ぬのに大して変わりはない。」⁽⁸⁾と言うことを知らない訳ではないと言い「今であろうと、二十年後であろうと、死んでゆくのは同じくこの私なのだ。」⁽⁹⁾と言う避けられぬ人間の宿命を悟る。「一部」において、なにごとに対しても「それは私にとってどうでもよいことだった」と無関心な態度を見せていたのとは、かなりの変貌ぶりである。

このようにムルソーのエクリチュールが変化するのは、当然語り手ムルソーの内面に変化が起こったことを予想させる。「二部」においては、実際に体験された出来事と、その原体験を後から「書く」ことによって追体験する際に起こる心理的な距離の隔りがみられる。「一部」においては「書く」場合、原体験にほとんど重なるような姿勢であった。極端な場合

(6) Ibid. p. 122~123.

(7) Ibid. p. 123.

(8) Ibid. p. 175.

(9) Ibid. p. 175.

には、母の死を知らせる電報を受け取った直後のように、すでになされた行為であるにもかかわらず単純未来形を使用してさえいるのである。「Ainsi, je pourrai veiller et je rentrerai demain soir.」⁽¹⁰⁾（注：下線部筆者）しかし、「二部」においては、原体験を追体験する際、語り手の意識は相当後退していると言える。

『異邦人』における物語の展開の仕方、とりわけ時間の進み方は全く伝統的な手法によっている。すなわち、歴史的時間（時計が時を刻む時間）にそって話が進行している。このことは「一部」においても「二部」においても異なるところはない。「一部」において最初にムルソーが養老院から電報を受け取って、母の埋葬に行き、アルジェに帰って日常生活に戻り、マリイと再会し、レイモンと親しくなり、その結果一人のアラブ人を殺害するにいたる話は、時間関係で言うと全く直線的に進められている。「二部」においてもこうした語りの手法は同様である。ムルソーはアラブ人を殺したことで逮捕され、捕らわれの身となる。このようにプロット（因果律による物語の展開）は構成され、ムルソーは被告となる。予審判事から尋問を受け、弁護士がつき、裁判が始まり、夏から夏へとほぼ一年がかりで裁判が進行し、結局は、「フランス人民の名において」斬首刑と言う極刑が言い渡され、ムルソーは刑場の露と消える運命を迎える。

しかし、重要なことは、ムルソーが犯した罪が死刑に値するものなのか、無期懲役が妥当か、又は10年の刑でいいのかと言うような裁判の審理の行方——物語の進行は一方ではこうしたことに興味をつないで行くものでもあるが、同時に「二部」はサルトルの言うように裁判の審理と言う形をとった「一部」の言葉による再構成であると言うことである。

「ここから、この小説の巧妙な構成が生まれる。一方には、実生活の無気力で退屈な日々の流れがあり、他方には、人間の推理と言葉とによる、先の現実の再構成が置かれる。読者ははじめ、純粋な現実と直面し、ついでその現実の、合理的に他の次元に転位されたものを再び見るが、それが

(10) Ibid. p. 9.

そうだとはい識別し得ない、これが大事な点。」⁽¹¹⁾である。

「一部」において、先で見たように⁽¹²⁾、場合によってはムルソーは追いついていったトラックを追い掛け、友人と一緒にそのトラックに飛び乗るような青年らしい生き生きとした行為をすることがあった。それにムルソーは全てに対して無関心、無感動であったわけではなく、彼の感性は太陽や、風や水の爽やかさに対しては開かれていたことを我々は見た。しかし、「一部」を通して見られるのは倦怠の日々であり、「無気力で退屈な日々の流れ」である。『異邦人』がヌーヴォー・ロマンの先駆けと見做され評価されるのはまさにこの点であった。ヌーヴォー・ロマンの作家達は世界を告発しようとはしない。ただありのままの世界（過去も未来もなく現存するだけで意味づけされない世界）を表現し提示するに止める、ということであれば、『異邦人』はヌーヴォー・ロマンの先輩であると言う名誉を担っていると言える。『異邦人』が新鮮な感じを我々に与え共感を引き起こすのは、我々の時代をいち早く表現し得たからであろう。

倦怠の日々は「二部」においても続いている。独房の中でムルソーは「鉄製の椀にうつった自分の姿を眺め」たりして無聊を慰めている。

「ある日、看守が来て、私がここへ来てからもう五ヵ月になると言ったときにも、その言葉は信じたが、よく理解できなかった。私にとっては、それは絶え間なく、独房に波のように打ち寄せて来る同じ日々であり、同じ作業の追求であった。その日看守の出でいったあとで、私は鉄製の椀にうつった自分の姿を眺めた。私の肖像は、それに向かって微笑んでやろうとしたにもかかわらず、なお真面目な顔をしているように見えた。私はそれを眼の前で揺り動かした。微笑したが、顔の方は相変わらず、厳しく悲しげなようだった。……私は天窓に近寄り、最後の光の中で、もう一度自分の姿をうつして眺めた。相変わらず真面目な顔だったが、このとき私自

(11) Sartre: SITUATIONS, I p. 110~111.

(12) 拙論「カミュの『異邦人』解釈」—(その1) 関西大学「文学論集」第37第4号 p. 30.

身も生真面目だったのだから、何の驚くことがあろう。しかし、それと同時に、またこの数箇月来はじめてのことだったが、私は自分の声音をはっきりと聞いた。その声が、もう幾日も長いこと私の耳に響いていた声であることを認め、この間、ひとりごとを言っていたのを了解した。そして、ママンの埋葬のとき、看護婦が言った言葉を思い出した。ほんとにそこには抜け道はないのだ。」⁽¹³⁾

このような倦怠の日々は「一部」、とりわけムルソーが自分のアパートでしょごい無げに過ごした「日曜日」と同質のものである。しかし、「一部」では自由の身分での無為であるが、「二部」では捕らわれの身分としての無聊である。独房は特殊で、非日常的な世界である。しかし、死刑を宣告されたムルソーが、限界状況にある人間存在の象徴であるとするならば、独房で無聊を慰めているムルソーは、人間存在の置かれている日常的状況を表象しているとも見ることのできるものである。

「一部」と「二部」は、このように連続している部分が認められる。と同時に、「一部」と「二部」で、同じムルソーが〈異邦人〉として決定的に異なっているところがある。それは作中人物としてのムルソーの在り方である。拙論⁽¹⁴⁾でみたように、「一部」におけるムルソーは他の作中人物との間では、これといった摩擦も、いさかきもなく平凡に生活している一市民であった。ただ、その平凡な一市民が〈異邦人〉に見えたのは、栄転に興味を示さず、「誰だって生活を変えるなんてことは決してあり得ないし、どんな場合だって、生活というものは似たりよったりだ。」⁽¹⁵⁾と言い、現状を告発することなく、むしろ消極的に倦怠の日々を過ごす時であった。

(13) L'Etranger (folio) p. 126~127.

(14) 拙論「カミュの『異邦人』解釈」— (その1)

(15) L'Etranger (folio) p. 68.

(16) 清水徹「『異邦人』読解 — その全体を支配する二重性」『明治学院論叢』'75. 3 p. 204.

しかし、「二部」におけるムルソーは、清水氏が指摘するように⁽¹⁶⁾、「自覚的な」〈異邦人〉に変身をとげている。だが結論を急ぐ前に「二部」におけるムルソーのありようを少し見てみよう。

ムルソーの語る物語において、彼を取り巻く人間関係は、「一部」と「二部」では明確に違ってくる。「一部」ではムルソーは「友人達」に囲まれ何ら〈異邦人〉ではなかった。しかし、「二部」では周知のように、ムルソーは予審判事、検事、裁判長と言った社会を代表する人物の前に立たされ、否応なく彼らと対峙する状況に置かれる。

フランス社会を内から支えているのはキリスト教、とりわけカトリックである。予審判事が十字架をムルソーの前に突き出して彼に改悛を迫るのは社会の代表としてであり、このところはそうした体制側の代表と一個人との確執のドラマである。

「私の考えでは、それ（予審判事の生：筆者注）は私とは何の関係もないことだし、そのことを彼に言ってやった。ところが、彼は、机ごしに、キリストの十字架像を私の目の前に突き出し、うわごとでもいうように叫んでいた。『私はキリスト教徒だ。私はこの方に君の罪の許しを求めるのだ。この方が君のために苦しまれたのがどうして信じられないのだ？』私のことを『君呼ばわり』していることに気付いたが、私はもううんざりだった。……いつもそうするのだが、よく話をきいてもいないひとから逃げ出したいと思うと、私は承認するふりをした。すると驚いたことには、彼は勝ち誇って、『それ見ろ、君は信じているんじゃないか。この方におまかせするというんだね？』といった。はっきりと私はもう一度あらためて、違う、といった。』⁽¹⁷⁾

宗教的慰安にすがろうとせず、キリスト教に改悛することを拒否し、あくまで現世的・地上的存在であろうとするムルソーの姿勢は、小説の最後のところで刑務所付司祭の説得に怒りを爆発させる様子を見ても終始一貫していると言える。こうしたムルソーの態度はどこから来るのであろうか。

(17) L'Etranger (folio) p. 107.

ムルソーが若きカミュの思想を共有していることは容易に推測される。カミュの宗教思想を云々するのは場違いだが、1946年の2月に行われたラトゥール・モーブールのドミニク教団修道院における信仰問答で、カミュがキリスト教徒になることを拒否する言明を行っていることを一言指摘しておこう。⁽¹⁸⁾

検事の考えの根本は、ムルソーの理解が正しいとするなら、ムルソーが「あらかじめ犯罪を計画した」⁽¹⁹⁾とすることである。検事は全てこうした観点からムルソーの犯罪を再構成しようとする。彼の論理によれば、ムルソーの犯罪は「最も憎むべき大罪、父親殺しの審理」と同時に行なわれることは当然であり、「精神的に母を殺害した男は、その父に対し自ら凶行の手を下した男と同じ意味において、人間社会から抹殺されるべき。」⁽²⁰⁾となる。従って、一人の人間を殺したと言うことそのものよりも、母の死に涙をながさず、埋葬の翌日に情事に耽けた云々と言った「一部」でのムルソーの生活態度が掘り起こされることになる。ムルソーの犯罪をこのような観点から裁こうとすることは、「一部」の最終章で事件の真相を知らされている我々には滑稽なほどの外れに見える。弁護士はたまりりかねて、「要するに、彼は母親を埋葬したことで告発されたのでしょうか。」⁽²¹⁾と言うが、弁護士のこの発言は傍聴人の笑い声にかき消されてしまう。

裁判長も「今や、この事件に一目無関係なように見えるが、実は恐らく大いに密接な関係にあると思われる問題に入らなければならない。」⁽²²⁾と言って、ムルソーに「なぜママンを養老院へ入れたか」と尋ねているところを見ても、予審判事や検事と同じ立場の者であることはいうまでもない。

ムルソーはこうして社会の体制と秩序を維持する人間に対し、鋭く対立させられる。事件の動機を尋ねられて「それは太陽のせい」だと述べて、

(18) Actuelles (Gallimard) p. 213.

(19) L'Etranger (folio) p. 154.

(20) Ibid. p. 158.

(21) Ibid. p. 150.

(22) Ibid. p. 137.

哄笑の中に埋まる時、ムルソーは作中人物の中で〈異邦人〉となる。セレスト及びマリイはじめ「一部」の友人達が、ムルソー側の証人として彼を弁護するが、裁判所側の論理に圧倒され、審理の流れを変えるまでにはいられない。

まず信仰すなわち宗教の問題を巡って裁判所側の人間とムルソーの間で対立が生じる。言うまでもなく宗教は社会体制を内側から支える強力な支柱だからである（十字架上のキリスト像を振りかざす予審判事とムルソーの対決はすでに見た）。判事が納得させようとする「罪」の概念がムルソーにはピンとこない。「あなたのようなかたくなな魂はみたことがない。私の前に来た罪人達は、いつもこの苦しみのお姿の前で涙を流したんだが」と言う判事の述懐にムルソーは「正にそれが罪人たちだったからそうなのだ」と思い、「真の悔恨よりもむしろ、ある倦怠をかんじている。」²³⁾と言う感想をもらす。

こうした宗教の問題から「罪人」を突き崩し、自分達のテリトリーに引き込み、区分けして体制を維持するのは彼らの常套手段だが、ムルソーは対峙する姿勢を崩さず最後まで終始一貫した姿勢をとる。最後に区分けしようと現れる刑務所付司祭に対してもムルソーの態度が変わらないのはいうまでもない。司祭は「降ろさねばならぬ罪の重荷を負っている」と言い、「人間の裁きは何でもない。神の裁きが一切だ。」²⁴⁾と語る。これに対してムルソーは「何が罪と言うのか私にはわからない」とはねつける。司祭が神の顔を「見る」ことを求めたのに対して、ムルソーが見た顔は「太陽の色と欲情の炎とを持っていた」²⁵⁾マリイの顔だった。このあとムルソーが司祭に対して激怒し、司祭のような生き方は「死人のよう」と言い、自分の生き方を全面的に肯定することは、改めて引用するまでもないことであろう。

社会を代表する裁判所側の人間、すなわち裁判長、判事、検事と言った

23) Ibid. p. 109.

24) Ibid. p. 181.

25) Ibid. p. 183.

人々と被告であるムルソーとが対立するのは、刑事事件としての罪状をめぐってのことであることはいうまでもない。

アデル・キングが指摘しているように⁽⁶⁶⁾、当時フランスの植民地であったアルジェリアにおいて、フランス人によるアラブ人殺害はそれほど重大な犯罪ではなかったという状況を別にしても、事件を審理し裁く人間が的確に殺人事件の真実を把握することができていれば（ということは、ムルソーの殺人事件が決して予謀されたものでなく、偶然の積み重ねの結果であると言うことを正確に認識すればと言うことだが）、法的に死刑と言う判決が下される例ではなさそうに思える。

しかし、結果は、周知のように母の埋葬の時に涙も流さず、翌日には女と海水浴に行き、喜劇映画を見た後、女を自分の部屋につれこみ、つまらぬことから、名のつけようもない風紀事件のけりをつけようとして殺人を犯したと言う理由から、その私生活が反社会的であるということで、〈道徳上の怪物〉として断罪されムルソーは極刑にしょせられるのである。「夏がれ」のせいで新聞が「親殺しの事件」と同等の扱いをし、報道した結果、ムルソーの事件が、俄に重要性を帯びてきたと言った偶然的な問題にはとどまらないのである。裁く側と裁かれる側との対立はもっと根の深いところにある。

現状を肯定し、体制を維持しようとする人々は原則の人間であり、彼らの判断基準はある一定の枠内に止まる。そして自分達の思考の範疇に入らないものに対しては本能的に不安を感じ自らの身を守ろうとする。ムルソーの対局に位置するのは検事である。検事は言う。

「あの男の魂を覗き込んでみたが、陪審員諸君、なにも見つからなかった。……実際、あの男には魂などないのだ、人間らしいものは何一つない、人間の心を護る道徳原理は一つとしてあの男には受け入れられなかった。」と⁽⁶⁷⁾。さらに続けて「あの男は社会の最も本質的な掟を無視するが

⁽⁶⁶⁾ Adele King: GAMUS (Oliver and Boyd) p. 47.

⁽⁶⁷⁾ L'Etranger (folio) p. 157.

故に、その社会にたいして何のなすところもない。また、人間の最も基本的な反応を知らないが故に、人間的心情に向かって訴えかけることもできない。」⁽²⁸⁾と言明し 死刑を要求してはばからない。

判事、及び裁判長も検事と同じ原則の人間であることは言うまでもない。先で見たように、判事は神を信じないと明言するムルソーに敏感に反応して「私の生を無意味にしたいというのですか」と恫喝する。裁判長も「今や、この事件に一見無関係のなように見えるが、実は恐らく大いに密接な関係にあると思われる問題に入らなければならない」といって、殺人にいたるまでのムルソーの私生活を洗い直そうとする。彼らの発想は共通したものである。弁護士はどうであろうか。「その原則への執着の故に、(意に反して) 検事の仲間之列せられて」⁽²⁹⁾しまう。小論の冒頭で引用したムルソーの心情を吐露した言葉、すなわち「むろん、私は深くママンを愛していたが、しかし、それには何も意味はない。すべて健康な人は、多少とも、愛する者の死を期待するものだ」という発言に、弁護士はひどく興奮し「そんなことは、傍聴人にも、予審判事のところででも口にしない。」⁽³⁰⁾とムルソーに約束させているところをみても了解されるであろう。

裁判長、判事、検事、看守、司祭及び検事側の証人、更に院長、門衛等には名前が与えられておらず、一方、被告、即ちムルソー側の証人であるマリイ、セレスト、レイモン、マソン及びサラマノ老人(ペレ老人はいずれの側とも考えられる)等はそれぞれ固有名詞を持っていることは、すでに指摘されているが⁽³¹⁾、こうした人間が名前を持っていないのは「彼らが自分の役割と一つになっている」⁽³²⁾からである。と同時にこのことは、ムルソーにとって、眼前の存在が正体不明の不透明なものになっていると

⁽²⁸⁾ Ibid. p. 159.

⁽²⁹⁾ Robert de Luppé: CAMUS (Classique du XX^e Siecle) p. 71.

⁽³⁰⁾ L'Etranger (folio) p. 102.

⁽³¹⁾ Bernard Pingaud: l'étranger de CAMUS (Classique Hachette) p. 46
~47

⁽³²⁾ Ibid. p. 47.

いう効果がある。カフカの『審判』における平凡な銀行員ヨーゼフ・Kの場合のように。

周知のようにヨーゼフ・Kはある朝突然逮捕されるが、どうゆう理由に基づく逮捕なのか、彼には皆目見当もつかない。予審判事の前に出ても、弁護士と面談しても、教戒師と問答をかわしても、確かなことは何一つわからないまま、結局は二人のフロックコートを着た紳士に、「犬のように」殺されてしまう。またムルソーは『城』における測量技師Kのおかれている状況にも似ている。これも周知のように、測量技師Kはある伯爵家の城から仕事を依頼されて、その麓の村に到着するのだが、膨大な神秘的な官僚機構に包まれた城は、外来者Kに対して永遠にその門を開かない。

こうした類似は単なる偶然だろうか。『異邦人』とほぼ同時に執筆がなされほとんど時を同じくして出版された『シーシュポスの神話』の付録の項でカミュがフランツ・カフカについて触れていることは、この類似が単なる偶然でないことを推察させるであろう。

検事を代表とする体制側の人間にとっては、ムルソーの罪は殺人罪そのものよりも、彼の社会の規範や慣習を無視したような「不感無情」なあり方が最大の不服の理由であることはすでに何度か指摘した。ロベール・ド・リュベは約30年も前に、次のようなことを述べている。

「『異邦人』は、このように日常生活の映画的再現をはるかに越えるものである。それは、ファリサイ人と税吏、慣習に恋々たる社会と遊戯の規則を守らぬ〈異邦人〉との対立を表現する。ムルソーは、実際ただの人ではない。偏見と虚偽を免れていてから。しかし、まだ〈反抗的人間〉ではない。真に生きた価値を発見していないから。彼は怪物であり、悲惨のなかに裸にされた人間である。ムルソーは真理の啓示⁽³⁾である。

それ故彼は憎まれる。「ファリサイ人は自分が脅かされるのを感じ、身を護るために告発する。この惨めな人生に結びついた酬い、もろもろの人間の価値が飛び立とうとしているだけに、いよいよ脅かされるように感ず

(3) Robert de Luppe: CAMUS p. 72~73.

るのだ。

— (中 略) —

フェリサイ人は、あの真の生命が迸り出ようとするのを見抜く。彼らは自分の原理だけを守っていればいいのではない。生きた価値を拒否せねばならないのだ。ありとある手すりの壊滅に魂を灼くよりも、むしろ乾燥した原則と〈安泰〉の方がいい。彼らは、人間を『シーシュポスの神話』から『反抗の人間』へと導く冒険を拒絶するのである⁽⁹⁴⁾と。

ムルソーが、裁判長から殺人の動機を尋ねられて「それは太陽のせいだ」と答えたとき両者の対立は頂点に達する。その間にある溝は埋めようもなく深く、両者の距離を隔てる。法廷内の哄笑に埋められてムルソーは孤立無縁となり、〈異邦人〉となる。

このように「二部」において、ムルソーは小説の内部であきらかに〈異邦人〉となる。この点「一部」における〈異邦人〉とニュアンスを異にする。

「一部」において、我々読者の心理的接近を阻む不透明なガラスがムルソーと我々の間にはめられていて、我々は感情移入を拒否される（こうした点が、我々にとってムルソーが〈異邦人〉に見えた最大の理由である）。

しかし、アラン・ロブ＝グリエは「すべての読者は、『異邦人』の主人公が世界との間に遺恨と幻惑とからなる、ある隠微な馴れ合い関係を保っていると言うことに気がついた。この人物と、彼をとりまく「もの」との関係は、いささかも潔白ではないのである。不条理はたえず、失望、反抗をひきおこす。

この人物を最後に犯罪にまでみちびくのは、きわめて正確に言って、「もの」なのだ」と主張しても誇張ではない。……だからこの本は、はじめのほうの何ページかが想像されるかもしれないような、そんな洗浄のきいた言語で書かれてはいない。事実、すでに明白な人間的実を托された対象だけが、念入りに、精神的な理由のために中性化されるだけである。……この小説のかなめの場面は、苦悩にみちた連帯の申し分のないイメージを我々に提供する。すなわち、仮借のない太陽は依然として〈おなじ〉で、アラビア人のつかんで

⁽⁹⁴⁾ Ibid. p. 73

いる短刀の刃の上のその反射が、主人公を真向かいから〈襲い〉、彼の眼を〈えぐり〉、彼の手はピストルの上で痙攣し、彼は太陽を〈振りはら〉おうとし、あらためて四発打ちこむ。……

不条理はそれゆえ、まさしく悲劇的ヒューマンズムの一形式なのである。』⁽³⁵⁾と分析、批判した。ムルソー殺人の場面で、急に文体が変わり、同時に読者と作中人物との関係も変化することは、すでに多くの研究家が指摘しているところである。

いままでガラスで隔てられ、意味が遮断され、ただその身振りだけを受け止めざるを得なかった我々は、語り手が読者との距離をちぢめる非中性的言語に切り換えたことにより障害物が取り除かれ、中性化されたイメージから、ここで一挙にムルソーの内面に引きずりこまれる。主人公に感情移入しようとする習性をもつ読者は堰を知ったようにムルソーと一体となる。「二部にはいると、作品の〈声〉はふたたびアラビア人殺害以前の中性的な声に戻るのだが、すでに一度確実にムルソーを内側から生き、それゆえにこの殺人を「太陽のせいだ」と説明してもけってふしぎには思わないだけの下地をあたえられてしまっているぼくらは彼に共感を寄せつづける。ふたたび戻ってきている中性的な声はぼくらとムルソーのあいだに距離をつくりあげているはずなのだが、その距離よりはムルソーと裁判官の論理とをへだてる距離のほうがはるかに大きいため、審理の進展状況にぼくらはひたすら反撥し、それが牢獄内のムルソーへの共感をさらにつよめる。』⁽³⁶⁾、というレクチュールを自然な流れとして我々読者はすることにになる。

こうして一人の〈異邦人〉が「一部」においては、むしろ我々読者にとって異邦人であったものが、「二部」においては、作中において〈異邦人〉となり、我々にとっては〈身内〉のような〈異邦人〉になるという表化が認められる。

カミュの分析する不条理とは断絶であり、「ズレ」である。したがって、我々

(35) Alain Robbe-Grillet: Pour un nouveau roman (idées nrf) p. 70~71.

(36) 清水徹「『異邦人』読解—その全体を支配する二重性」p. 204.

(37) Ibid. p. 111

に対世界との不条理を突きつけるだけでなく、人間社会に付きまとう不条理を見せるためには、『異邦人』は、二部構成でなければならない。そして、二部構成の小説『異邦人』は、これで一つの世界を形成するものであって、一方を欠いても完結し得ないことは言うまでもない。まさに「一部」と「二部」は車の両輪である。仮定の上での議論は不毛だが、もしこの小説に「二部」がなければ、『異邦人』は「断絶の、ズレの、離郷のロマン」にはならないし、法廷の下す「不条理な」判決を前にして、平凡な会社員ムルソーが、「不条理の英雄」に変貌するというレシ（物語）を我々は知らないことになる。時間構成の点からみて「一部」と「二部」では、かなりの不均衡が見られるという指摘や⁽⁹⁷⁾、語り手の回想の中で、話者の事実に対する時間的・心理的距離の相違などバランス上問題があるという指摘も可能だが、「読む」と言う行為を最初から反省的にすすめることは恐らくしないであろう一読者の立場（ストーリー又はプロットを追いつけるという立場）では、『異邦人』は揺るぎない一つの完結した世界を提出していると言える。

スタンダールが、自分を理解してくれる読者を50年後、100後に求め、自分の作品を「少数の幸福な読者」に捧げ、事実、彼の予言のようになったということは、文学史的エピソードになっている。本年、1989年現在で、『異邦人』刊行後ほぼ半世紀が過ぎようとして（『異邦人』刊行は1942年である）、なお、『異邦人』がベストセラーに名を連ねているということこれも又文学史的エピソードになる。

「印刷所から出るとたちまち、カミュ氏の『異邦人』は喝采を博した。」⁽⁹⁸⁾とサルトルが当時の状況を述べている。『異邦人』の人気はそれ以来、フランスのみならず世界各国で今なお続いている。『異邦人』のあの「爽やかなショック」は、主に若い世代の人々に根強い人気を博しているようだが⁽⁹⁹⁾、50年経ったいまなおその新鮮さを失わないであるのは、母親を埋葬した翌日であるということなど意に介さず、海水浴を楽しみ、マリイと親しく

⁽⁹⁷⁾ 「一部」は約18日間の出来事であるが、「二部」は約一年にわたる事柄の記述である。

⁽⁹⁸⁾ Sartre: SITUATINS, I p. 99.

なり、パリへの栄転に関心を示さず、太陽の国での平凡な生活の中に幸せを感じている「一部」のムルソーに共感するものを感じるからではなかろうか。

(この論文は1988年度関西大学文学部共同研究費による研究をまとめたものである。)

(本学教授)